

ご意見、ご感想は〒530-8251 毎日新聞「プラスα面健康・医療」係。ファクス(06・6346・8228)、メール(o.iryu.hotline@mainichi.co.jp)へ。

おおさか発・プラスアルファ

インプラント 重要な術前診査と診断

からだ
向き
α

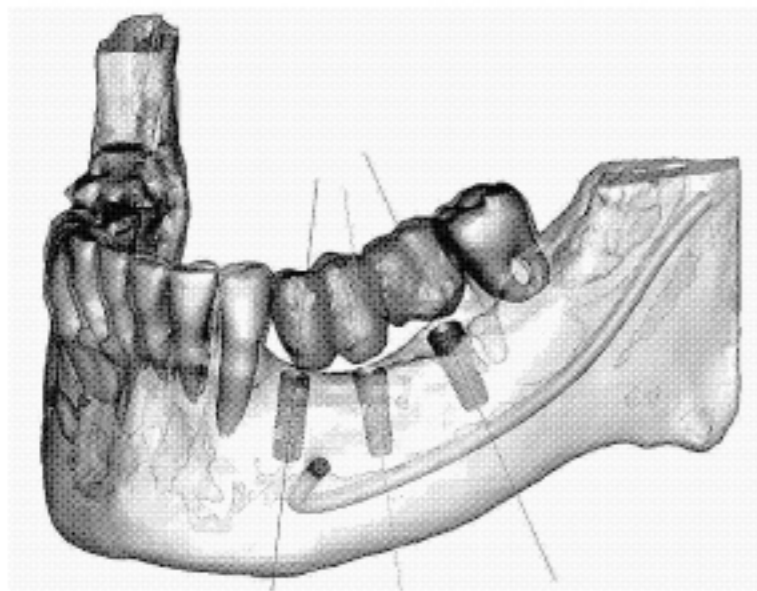
インプラント治療の最初のステップは術前診査と診断です。末永く安定して使える補綴物(人工の歯)を得るために、歯の欠損部でどの程度の荷重(噛む力)を受け止める必要があるのか、見た目や発音、清掃性に支障が起きないためにはどのようなデザインを与えればよいのか、などについての検討を行います。補綴物はインプラント治療のゴールであり、診査・診断はゴールにたどり着くまでにどんな手段で、どういう道順で進めてゆくかを決めるための大変重要な手続きです。

CTIで骨の形状を把握

まず口の型取りから得られた口腔内石膏模型を、上下の顎の位置と動きを再現できる特殊な装置に取り付け、将来インプラント上に固定される補綴物が残存歯と理想的な噛み合わせとなるデザインを設

計します。その形を実際に歯科用ワックス(蠟)を用いて作ってみて、設計された補綴物をインプラントが最も効果的に支えるためには、どの位置と方向に何本埋め込む必要があるかを決めていきます。特に本数については、喪失した歯の本数と埋め込むインプラントの数が同数になると思われがちですが、大白歯のように極めて大きな力を受け止めなければいけない場所では、大白歯2歯分の欠損に対してインプラントを3本埋め込んだり、逆に前歯では4本の歯を2本のインプラントで支える場合もあり、一定ではありません。

次いでインプラントの長さも検討します。できるだけ長いインプラントを埋め込むことができれば、大きな荷重を支えるためにも、また長期的に顎骨がやせてゆく可能性に備えるためにも有利です。しかし、インプラントが下顎の中にいる下歯槽神経という太い神経を傷つけて麻痺が起きたり、上顎ではインプラントが上顎洞(副鼻腔)という空洞に突き抜けたり、入り込んでしまう可能性もあるため、埋め込む予定の部位に対して適切な長さのインプラントを選択しておくことは大変重要です。



CTスキャンのデータに基づいた三次元シミュレーション画像

患者さん本人の顎骨の立体模型を作製し、手術前に顎骨の形態を直接確認したり、専用のソフトウエアによるコンピュータ上でインプラントの埋め込みシミュレーションも可能となってきています。こうしてインプラントの埋め込み手術の準備が整いますが、手術に先立って全身疾患の診査も必要です。高血圧や肝疾患は手術に伴って重大な予想外の問題を起す危険があります。また、糖尿病の場合には血糖値のコントロールを行います。さらに、院内感染予防のため感染症の検査も受けていただきます。

今回はインプラントの埋め込み手術についてお話しします。



河村歯科医院
(大阪市中央区高麗橋)
院長 河村達也

土

健康・医療